

令和5年度第2回一関市博物館協議会 会議録

- 1 会議名 令和5年度第2回一関市博物館協議会
- 2 開催日時 令和6年2月7日(水) 午後2時から午後3時25分まで
- 3 開催場所 一関市博物館 研修室
- 4 出席者
 - (1) 委員 熊谷常正委員(会長)、砂金文昭委員(副会長)、佐藤幸雄委員、石井美樹子委員、佐藤泰彦委員、千葉信胤委員、佐野修弘委員、千葉幸子委員、菅原真利子委員、齊藤三郎委員、佐藤浩委員
 - ※ 欠席者 小笠原浩委員、佐藤憲一委員、平澤広委員、松岡千賀子委員
 - (2) 事務局 時枝直樹教育長、菊池勇夫博物館長、佐々木修路博物館次長、相馬美貴子博物館主幹、大衡彩織博物館副館長兼学芸係長、滝澤清博物館庶務係長、高橋紘博物館学芸員、鈴木雄己博物館学芸員
- 5 議題
 - (1) 令和5年度事業の取組状況について
 - (2) 令和6年度事業計画について
- 6 公開、非公開の別 公開
- 7 傍聴者 0名
- 8 時枝直樹教育長挨拶

協議会委員の皆様には、お忙しい中お集まりいただき御礼申し上げます。また、一関市の教育行政、博物館運営について、日頃よりご協力とご指導を賜り併せて感謝申し上げます。初めてお会いする方もいるので、自己紹介させていただきます。私は昨年10月29日より教育長に就いております時枝直樹と申します。どうぞよろしくお願いたします。

さて、昨年5月8日から新型コロナウイルス感染症の感染法上の位置付けが変更になり、一関市の博物館ではコロナ禍以前と同様に広く多く皆様にご来館いただけるように取り組んでいるところであります。昨年6月には、博物館に所蔵しております大槻家関係の資料が、国の重要文化財に指定され、これを記念した展覧会を7月中旬から開催し、その資料の一部ではありますが、市民をはじめ多くの方々に広く紹介してきたところであります。また、昨年10月には、昭和を代表する洋画家の福井良之助の生誕100年を記念して、生誕100年福井良之助展を開催し、2,948名の方に観覧いただいたところであります。現

在は、テーマ展「縄文時代のモノづくり」と題して、一関周辺から出土した土器や石器などを中心に、縄文時代のモノづくりについて紹介しているところがあります。このほか各種講座や体験学習等、年間を通して地域の歴史や文化を親しみながら学んでいただくよう、様々な事業に取り組んでいるところでもあります。

本日開催した小中学校の校長会議において、小中学校の学習に博物館での見学や資料が役立つということを紹介したところでもあります。もう1つ話したことは、現在子どもの数が大幅な減少傾向にあるため、1人1人に期待される役割が大きくなるということでもあります。小学校、中学校におけるキャリア教育が大切になってきますが、その土台の中の1つとして、地域の郷土、人を知ることが、地域を支えるという点で重要であるということをお話ししたところでもあります。こうした点で博物館の役割は、学校教育に限らず非常に重要な影響を及ぼすものと捉えているところでもあります。

本日は、今年度第2回目の博物館協議会です。この時期は来年度の市の概要も見えてきますので、博物館事業においても、主なところをお示しできる段階となっております。本日の会議では、今年度の事業実施状況と次年度の事業計画について、担当から説明させていただきます。より良いものにしていくために、委員の皆様には忌憚のないご意見をいただきたいと思っております。

9 菊池勇夫博物館長挨拶

私の方からは後期の博物館の活動を中心に、来年度の活動も含めお話させていただきます。

後期の活動として一番の中心となったのは、一関ゆかりの画家である福井良之助の生誕100年を記念して開催した企画展「生誕100年福井良之助展」ということになります。ガリ版や孔版という、学校教育では非常に馴染みのある印刷の道具を用いて美術制作を行い、素晴らしい作品を生み出した作家と、この地域との関係に光を当てて展示できたことは、非常に喜ばしく思っています。この企画展を通じて、寄贈、寄託の申し出があり、本館のコレクションの目玉の1つになってくるのではないかと感じております。展覧会を開催することにより、また新たな資料が集まってくるという効果を改めて感じた次第です。現在はテーマ展「縄文時代のモノづくり」を開催しております。1つの遺跡に注目するのではなく、様々な物をじっくり見て楽しんでいただくというような構成になっており、子どもから大人まで楽しめる展示になっているのではないかと思います。

次に、調査研究活動、講座について、骨寺大学は骨寺村荘園遺跡村落遺跡調査研究会の方々を中心となり、毎年講座を開催してまいりました。その成果として、荘園絵図の読解が進み、古代から現代までの骨寺の歴史が大分解明されてきたと思います。そうした点で、骨寺村荘園遺跡の世界遺産追加登録のために貢献してきたと思いますが、残念ながら追加登録から外れてしまったという結果となってしまいました。研究活動そのものは、大きな意味を持ってきたと思いますし、これからも当館の活動の柱として調査研究は続けていくことになると思います。骨寺大学については、連続講座ではなくシンポジウムのような形の報告会に模様替えしようかと思っております。もう1つは大槻家資料です。この価値を地元の皆様に伝えていく活動が、さらに重要になってくると思います。資料の修復、調査研究、さらに講演会なども新たに設け、様々な普及活動を進めていきたいと思っております。このほか、当館の持っているコレクションについて、一関藩主の田村建顕の和歌が最近研究者に注目されており、国文学研究資料館の共同研究の中で、田村建顕あるいは一関藩の和歌をテーマとした共同研究が、来年度から始まることになっております。当館のコレクションあるいは収集資料が、外部から関心を集めており、学会や研究会などにも発信していけるような活動をしていければと思っております。

来年度は、これまで企画展、テーマ展と呼んでいた展覧会の名称を、特別展、企画展という名称に変更いたします。特別展は、仙台、一関藩の江戸屋敷について取り上げる予定としております。このほか、企画展は現在の問題に对应していくようなテーマなどを企画しており、これから報告させていただきますので、様々貴重なご意見などを賜りたいと思います。以上よろしくお願いいたします。

10 協 議

(1) 令和5年度事業の取組状況について

資料「協議1」に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委 員 1点目、「道具でみる昭和の暮らし」について、常設展示の片隅に展示してあるが不自然ではないか。昭和の資料だから民俗資料館に移動するか、撤去した方がよいのではないか。

2点目、照明について、LED化で明るくなった部分は大変良いと感じたが、「一関のあゆみ」のコーナーは、照明が暗くて字が見づらいと言われる。将来でも構わないのでLED化にしてほしい。

事務局 1点目の「道具でみる昭和の暮らし」については、小学校3年生、4年生の授業に「昔の道具」という単元があり、そのために博物館を

利用していただいている。近隣の小学校が民俗資料館に行くとなると、移動時間の増加に伴い、カリキュラムの変更など別な取組をしなければいけなくなる。また、展示ケースに入れていない場所ということで、その場で実物の資料を少し触ったりできる体験を行っており、継続していく意味があると思っている。

2点目のLED化については、「一関のあゆみ」もLED化を計画している。

委員 古文書講座－浅野内匠頭身柄預り一件に関連して、田村藩の脇田郷にいた侍が、四十七士の子どもを一関に連れてきて、15歳まで育てたとよく聞かれるが何か資料はないか。

事務局 以前にも質問をいただき同じ答えになってしまうが、そういった資料は未だ見つけられていない。

委員 展示室の環境調査で指摘されたこと、あるいは問題として捉えていることはあるか。

事務局 環境調査について、温度や湿度に関しては、空調機が建築後25年を経過し不具合が多く出ているため、除湿機や調湿材を入れて調整をしている。虫に関しては多く出ている時があり、そうした場合には清掃を強化し、虫の餌となるものを取り除き燻蒸を行っている。空気中の酸性、アルカリ性のガスについては若干検出されているが、建設後から大分経過しているため問題は少ないと思っている。それぞれ問題が出てきた時点で対策をとり、重要文化財などの展示が許可される公開承認施設を維持して行きたいと考えている。

委員 収蔵庫の環境はどうか。

事務局 収蔵庫について、温度や湿度は一定である。虫が発生していた時もあったが、今年度収蔵庫を燻蒸したので良い状態を保っていると思う。若干、資料を詰込み過ぎの状態であるとのことで、今後の保管場所の確保が課題となっている。

委員 是非増築を検討してほしい。

議長 館内環境の維持管理は本当に大変と思う。何か問題が出てから動き出すのでは遅い場合もあるので、将来的なビジョンとして環境維持を位置付け、悪い条件が生まれてくる前に対策を講じることができる体制について、予算も含めて配慮していただきたい。

委員 資料の13ページ「のぞいてみよう学芸員の仕事」は、参加者が7人

とあるが、これは中学生の職場体験学習とは別のものか。図書館だと「1日図書館員体験」をやっているが、博物館では1日学芸員のような事業に取り組む予定はないのか。

事務局 博物館の場合、学芸員の仕事を体験するとなると実物の資料を扱うことになるため、今のところは予定していない。「のぞいてみよう学芸員の仕事」は、夕方の時間に一般の方を対象として、拓本や資料の写真撮影の様子を見る内容となっている。

委員 参加された7人は全て一般の方か。

事務局 全て一般の方である。

委員 民俗資料館と一関市博物館の関係を確認したい。本館、分館といった関係なのか。それとも独立しているのか。

事務局 独立した別々の施設である。

委員 青い目の人形について、今から約90年前の人形が岩手県に18体残っていたが、そのうち4体が一関市にある。小学6年生の教科書にも載っており、この人形について学習したいという声がある。なぜ、この博物館に展示して大々的に宣伝しないのか。民俗資料館でも廊下に展示しているだけなので、もったいないと思っていた。

事務局 青い目の人形については、岩手県立博物館で県内の青い目の人形を全部集めたときに、一関市内のものだけを過去にここで展示したことがある。

(2) 令和6年度事業計画について

資料「協議2」に基づき事務局から説明を行った。以下、質疑応答等。

委員 1点目、1ページの企画展「水害と火災—災害の歴史をふりかえる—」について、水害などの発災は一関市では6月から秋にかけてだと思うが、開催時期を1月から3月までとした理由はなにか。

2点目、5ページの骨寺村荘園遺跡村落調査研究について、先程の館長挨拶でも骨寺大学を見直すということだが、研究報告会に集約していくということよろしいか。

事務局 2点目から、骨寺大学は一般の方に研究の成果を聞いていただく連続講座として、年6回ほど開催している。研究報告会も一般の方を対象としたものではあるが、1回の開催とするため、内容を集約しつつ、規模を縮小して開催すると捉えている。

1点目の災害に関する企画展を、災害が多く発生する時期ではなく、

なぜ1月から3月に開催するのかということについて、委員の仰るとおり開催できれば最も良いところだが、学芸員が準備をするタイミングが、その時期に合わないことが最も大きな要因である。そのほかに、集客を考え①の植物のデザインであれば春頃の時期、②の動物については子どもの来館が見込める夏休みの時期、特別展については最も観光客が訪れる秋に行いたいと考えている。このような事情から「水災と火災」については、年度末の時期となった経緯もある。

委員 要望だが、企画展「どうぶつー狩る・祈る・調べる・愛でるー」について、「助ける」をテーマに加えてはどうか。ペットを飼っている子どもから、今起こっている災害や戦争時におけるペットの保護について質問される事が多い。人間と動物の愛情に関する資料も多いので、テーマの1つとして取り入れてはどうか。

議長 人間と動物との多様な関わりを表現していただきたいということだろうと思うので、よろしく願いしたい。

委員 古文書講座はどのような内容を予定しているか。

事務局 来年度の古文書講座は、初心者向けと一般向けのものを予定している。初心者については手習いの教科書を使ったもの、一般向けについては具体的には未だ決まっていない。

委員 大東古文書同好会で、鳥畑家の御用定留の三の上巻を2月末に発行する予定になっている。各団体の方にお送りする予定なので、よろしく願いしたい。また、今年1月から大東古文書同好会の初心者講座の中で、御用定留の壺の内容を詳しく解説している。再来年には、御用定留の三の下巻も発行する予定である。90冊くらいの古文書を読み終わるのは難しいと思うが、後継者を育てているところで、毎年、古文書同好会や初心者講座などを開いて、1人か2人ずつ入会してもらっている。そういう人たちに、いずれは継続してもらいたいと思っている。

議長 古文書も含めた地域の様々な歴史文化に関わる人たちを底上げしていく上で、様々な団体との連携もまた必要になってくると思うので、よろしく願いしたい。

委員 3ページ(6)「後三年合戦絵詞を読む」と、(7)「坂上田村麻呂の伝記を読み解く」の講座について、講師は学芸員が行うのか。

事務局 そのとおりである。

委員 5ページの(3)骨寺村荘園遺跡村落調査研究について、いわゆる遺跡、史跡地としての骨寺村荘園遺跡という方向からの調査研究ということになるのか。重要文化的景観として、一関市の本寺の農村景観ということも、価値を共有していく上で重要と思っている。これからどのような方向で進んでいくのか、見通しを聞きたい。

事務局 5ページの(3)骨寺村荘園遺跡村落調査研究の説明文1行目のところで、多角的な視点での調査研究としている。今年度までは、全6回の講座形式だった骨寺大学を、来年度は1回だけの研究報告会とする予定であり、いかにこの多角的な視点を盛り込んで、展開させていくことが課題になると思う。博物館だけではなく、ほかの機関との関係も考えながら探っていくことになるのではないかとこのところが、今お答えできる内容かと思う。

議長 骨寺は、史跡と文化的景観の2つを併せ持つということで、大きな価値がまた顕在化してくると思う。それを忘れないでいただきたいというのが委員のお考えかと思う。よろしくお願ひしたい。

委員 中世の風景を維持することと、骨寺の寺を発掘するということの2つを維持していく方向か。

議長 骨寺遺跡よりも本当に小さいポンペイ遺跡は、100年掘ってもまだ掘り切れない。本寺の範囲を考えると、計画的な調査が必要になってくると思う。

事務局 中世の景観と荘園資料の2本立てになるのだろうと思う。これまでは、世界遺産登録の追加登録を支えていくという側面があったので、どうしても荘園遺跡の調査研究に力を入れていくことになったと思う。その場合でもここの骨寺大学というのは、前館長が今おっしゃった言葉で言うと、骨寺千年の歴史を明らかにしていく、そこに住み続けた方たちが長い歴史の中で、今の景観が作られているということ、次にどのようにつなげていけるか。まだまだ骨寺について語るべきことが多いのではないかと思う。骨寺の歴史、文化的景観を明らかにすることが、ほかの地域のことにも明らかにすることに貢献するのは、自然と思う。そのように思っただけのような活動が、必要と思っている。

議長 骨寺だけではなく、それに関わるあの場所というのは様々な形で派生していき、一関市や広域的な中で文化財というものを位置付けなが

ら、まちづくり、地域づくりに生かしていこうということになるかと思う。その中核的な施設になるのがこの博物館と思うので、ぜひ来年度も頑張っていたきたいと思う。

12 担当課 一関市博物館